

経営理念		学校教育目標 <健康> <自主> <礼儀> <めざす児童象> ○運動を楽しみ、元気な子ども ○進んで学び、よく考え行動する子ども ○自分やなかまを大切にしたいやりのある子ども <めざす学校像> ○一人一人を大切にしたい学校 ○子ども・教師・保護者・地域が語り合う学校 ○笑顔があふれる学校 <目指す教師像> ○進んで研修し、資質向上に努める教師 ○保護者や地域との連携を大切にしたい教師 ○豊かな人間性をそなえた教師						
経営目標	評価項目	自己評価			学校関係者評価		改善策等	
		達成状況	評価	改善策案	考察	評価		
健康	○一人一人の体力・運動能力の向上	①めあてに向かって体力、運動能力の向上を図る。	体育の授業での運動身体づくりプログラムや体育的行事の実施により、年間を通して運動量の確保に努め、めあてに向かって継続的に努力する機会を確保した。また、休み時間には校庭や体育館で友達と体を使って遊ぶ姿がたくさん見られる。	B	体育の授業や年間を通じたマラソン・なわとびタイムの実施により、児童が「苦手な運動もあるけれど、体を動かすのは楽しい」と感じられる取組を継続していく。また、家庭と連携して休日も運動に取り組めるように促す。	運動が苦手な子どもたちが楽しく向き合えるよう、好きなことから挑戦させたり外部講師を招いたりして、体を動かすことの楽しさの契機づくりをしていく。家庭には、学校や地域からの情報を提供していく。	B	校内研修により教職員が児童の体力を高めるための共通理解と実践を行い、児童が楽しんで主体的に運動できる環境と機会づくりにさらに努めていく。また、休日の過ごし方についてメディアコントロールと併せて家庭と連携を図っていく。
		②健康安全に気をつけ丈夫な身体をつくる習慣を身に付けさせる。	外部講師による食育や歯磨き指導、児童会給食委員会による「給食クイズ」を実施し、食への興味をもたせるとともに、意識改善を図ってきた。8割の児童が残さず食べるように心がけている。	B	外部講師を活用しながらバランスの取れた食事の大切さを今後も指導するとともに、保護者に給食のメニューを紹介したり、試食会を設けたりしていく。	成長期や将来のリスクを考えた食事の取り方について児童の知識を高めたり、家庭への情報提供をしたりしていく。	B	児童への保健指導を充実させていくとともに、保護者への情報提供を継続し、家庭と連携して丈夫な身体をつくる習慣を身に付けさせる。
		③自己の健康安全管理が図れるような保健指導につとめる。	毎日8時間以上の睡眠時間の確保は8割以上の児童が達成できている。一方、メディアに触れる時間が3時間以上と回答した児童が、昨年度24%から今年度25%と微増傾向である。	C	メディアコントロールについて、児童会委員会からの呼び掛けを継続するとともに自分手帳を活用したり、睡眠の大切さについてのお便り等を通して啓発したりしていく。	メディアコントロールについて、児童が自らルールを作成し自己評価することも対策の一つとなり得る。良質な睡眠と併せて規則正しい家庭生活について考えさせていく。	B	児童会委員会からの呼びかけや自分手帳の活用により、児童に家庭生活を振り返る機会を設けるとともに、PTA活動などにより家庭と連携した取組ができるようつとめていく。
自主	○自分で課題を見つけ、学び方を身に付け、学び続けようとする意欲と実践力の育成	④学習意欲を高める手だてを工夫し、学力向上を目指す。	授業改善に向けて校内の研究授業を互いに積極的に参観し、児童の学びの姿で事後研究を行うことで、教師の授業改善への意識が高まった。95%の児童が、「ほとんどの授業がわかりやすい」と感じている。	A	今後も「授業スタンダード」「田村市ミニマム」を活用した授業改善に努める。また、児童同士が互いの考えを伝え合うを活動を様々な授業に取り入れていく。	授業がわかりやすいとの回答が増えたことは、先生方の努力の賜である。しかし、学力向上の具体策については一歩踏み込んだ対策が講じられるといい。	A	「子どもの学びの姿をもとにした授業研究会」年20回を継続させ、算数科年2回の授業公開により、教師の授業力を高める。また、学力向上支援アドバイザーや外部講師を積極的に活用する。
		⑤基礎基本が確実に身に付く授業の充実を目指す。	児童の7割弱が自分の考えを発表したり、質問したりすることができており、授業でできないところや分からないことをなくすために努力していることが推測できる。	B	教師は児童の困り感を見取る力を高め、「授業スタンダード」「田村市ミニマム」を活用して、誤答を生かす授業の展開や、発表・質問しやすい雰囲気作りを今後も継続していく。	質問できない児童が減っていることは良い傾向である。「わからない」と言える環境を作っていくためにも、創意工夫をしながらいろいろな取組に挑戦してほしい。また、児童をよく見取り、授業改善に生かしていく。	B	自己肯定感や自己有用感を高め、本音で話し合える授業の雰囲気作りにつとめる。また、QUの分析から手立てを具体的にし、学級生活満足群の児童を増やす。
		⑥学年に応じた学習の仕方を身に付けさせ、主体的な学習の展開を図る。	児童の半数は自主的に家庭学習に取り組んでいる。しかし、家族の誰かに言われてから学習に取り組む児童も2割いる。	B	学校では、「家庭学習スタンダード」を活用して、児童の自己マネジメント力を身に付けられるよう、児童に指導し、保護者に啓発していく。	メディアやゲームなどの誘惑が多い中、自主的に学習へ取り組めるかは自己管理と意志の強さを育てる必要がある。宿題だけでなく、自主的な学びを積極的に評価し、学ぶことの楽しさを実感させていく。	B	家庭学習と授業を連動させ、児童が家庭学習の必要性を実感できるように工夫するとともに、メディアコントロールと併せて「家庭学習スタンダード」について保護者に啓発していく。
礼儀	○互いのよさを認め合い、自他を大切にしたい心の育成	⑦挨拶、返事や礼儀を重んじ、思いやりの心を育てる。	自分から挨拶をする児童が増えてきている。誰に対しても正しい言葉づかいのできている児童は少ない。	B	挨拶、返事や礼儀を重んじ、思いやりの心を育てるために、道徳科の授業を核に、学校教育活動全体を通じた指導をしていく。	挨拶や思いやりなどで良い傾向にあるのは、児童が学校生活を心穏やかに楽しく過ごしている証である。挨拶や言葉づかいは毎日の積み重ねであるため、家庭と連携した指導をしていく。	B	礼儀を重んじた行動について指導を継続するとともに、相手を思いやった生活について児童の思考が深まるような道徳科の授業や指導を心がける。
		⑧道徳、特別活動、体験活動等を通して心の豊かさを養う。	自分の仕事を忘れずに行うばかりでなく、他の仕事にも気付いて活動する児童が昨年度より増えている。また、9割以上の児童が学校やその他の公共施設、物を大切に生活している。	B	仕事の役割を明確にしたり、称賛したりして自己有用感を高める。また、体験活動を行う際はもちろん、授業の各場面において協働的な場面を設定していく。	係活動については教職員のA回答が増え、かつ児童が考える自主性のレベルも高まっていると考えられる。	B	係活動を通して自己有用感を高めるとともに、学校地域支援本部と連携した体験活動を充実させ、授業の各場面において協働的な活動を設定していく。
		⑨地域・保護者の方々と交流を通して郷土愛を養う。	学習ボランティアの支援を受けながら学ぶことを好意的に捉えている児童・保護者が多いことが分かった。	A	学校支援ボランティアや地域の人材・施設の活用を積極的に図るとともに、教育課程に位置付けて、計画的に教育活動を実施していく。	A回答が高くなっており、多様な視点から児童の成長を支援していくことの有用性が反映されたものと考えられる。地域の方々とふれあうことで、礼儀を重んじ思いやりの心が育つと考える。	A	地域の方と子どもが共に創る取組を増やし、児童の創造性・郷土愛を養う好循環を、総合的な学習の時間を中心につくっていく。